



関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

# FUKKOU

Vol.6

◀ contents ▶  
目次

○巻頭言

阪神・淡路大震災と災害復興制度研究所

杉原左右一…………… 1

○論文

災害後の暮らしと復興の関係

——能登の被災地から

村井雅清…………… 2.3

○公開研究会実施報告

足湯が拾った“つぶやき”読み解く研究

会実施報告 平田誠一郎…………… 4.5

○観感学楽—被災地ネット

阪神・淡路伝え、今なお発信

/ 大牟田智佐子

抗震救災・众志成城

——四川大地震の被災地から

/ 矢守克也…………… 6

○論文募集

研究紀要「災害復興研究」第1号、刊行へ

…………… 7

○事務局だより

日本災害復興学会 HP 立ち上げについて

日本災害復興学会 会員募集中!

編集後記…………… 8

## 阪神・淡路大震災と 災害復興制度研究所

関西学院大学 学長

杉原左右一

阪神・淡路大震災の時、私は関西学院大学の学生部長でした。阪急電車の門戸厄神駅で下車し、半壊、全壊の家屋を目の当たりにしながら関学まで歩きました。大学は大きな被害は受けていませんでしたが、周辺の下宿で亡くなられた学生の最期の様子を聞き、ただただ呆然とするばかりでした。それからの数カ月間、学内の災害対策本部（発足当初は全学連絡会）に加わり、関学の学生会館を被災した周辺地域の方々へ開放したり、行政に携わる方々と災害復興の対応・相談を行ったりする日々が続きました。その間、多くの方から、学生会館に避難している被災者に、食料や、衣料、新聞などの援助が多数寄せられ、関係者としてそれらの善意に大変勇気付けられました。



実は私の専攻分野は確率論や統計学なのですが、以前から特に日本が地震予知の分野では世界でも有数の先進国であることはよく知っていました。しかし、地震発生の確率を如何に精度高く推定できたとしても、確率を1とすることは論理的に不可能であり、また、地震予知により被害を最小限に食い止める努力は出来ても、大きな自然の力を食い止めることは不可能です。阪神・淡路大震災での体験を通して、精度の高い予知と、発生時の対策と並んで、地震後の復興に如何に携わるかが重要な課題ではないかと考えるようになりました。私が特に感じた事は、被災者、支援者、行政機関、そして専門家や研究者が、既成の枠に捉われずに、お互いに連携をとり、情報を交換しながら、臨機応変に行動することができる柔軟な組織作りを行うことが重要ではないかということです。

その後も世界各地で発生している災害の現実を知るにつけ、阪神・淡路大震災の被災地にある大学として、また本学の建学の精神に照らして、関西学院大学災害復興制度研究所の使命をあらためて強く思い、今後の活動に期待するものです。



▲被災家屋の残る通学路



▲グラウンドでの炊き出し救援風景

# 災害後の暮らしと復興の関係

## ——能登の被災地から

村井雅清

被災地 NGO 協働センター 代表



2008年2月下旬、世界で活躍する文学、映画、音楽、演劇などの関係者が一堂に集まり、東京で『世界P.E.Nフォーラム「災害と文化」』が行われた。基調講演に立った大江健三郎さんは「人間は不条理というしかない災害に襲われることがある。それにぶつかり、引き倒されることもあるが、すぐまた立ち上がろうとし、回復を始める。人間はそういう存在なのだというのが、私の小説の基盤になった。」といい、人間には回復力があることを強調された。また中国の著名な小説家である莫言<sup>モイケン</sup>さんは、「生きたいと強く思ったとき、思いもよらない想像力を発揮するのが人間です。」と語っている。是非、今中国四川省大地震の被災者で懸命に再建しようとする人たちにこの言葉を伝えたい。他方、日本政府のイニシアティブで進めてきた人間の安全保障委員会の共同議長<sup>モイケン</sup>の一人、アジアで最初のノーベル経済学賞受賞者アマーティア・セン教授（インド）は、「人間には潜在能力があり、国家は潜在能力が発揮できる機会を保障しなければならない。」といい、同委員会は貧困と欠乏からの脱出のためには「保護とエンパワメ

ント」が不可欠と提言している。どうも私には回復力とエンパワメントは能登の暮らしに見られるエネルギーと同じに見える。

さて、私は昨年の能登半島地震以来神戸、大阪、新潟の大学生などで結成した足湯ボランティアとともに、被災地入りを重ねてきた。足湯ボランティア活動をきっかけに能登に通いながら、「能登支援とは、何を支援することをいうのだろうか？」と悩み始めた。それは能登の被災地を廻っていて、被災者と話していても誰一人苦痛で顔をゆがめておられる方に出会わないのである。「何とかなるだろう！」と“じんのび”（のんびり）と構えておられるのか、いつも笑顔が絶えないほどだ。「この強さはどこから湧いてくるのだろうか？」と想像しながら、輪島の朝市の“かか”たちや、門前町の総持寺祖院の境内のお店の方や、昔ながらの町並みを残す黒島の人や、全壊率の高い門前町鹿磯の人や陽気な穴水町の仮設に住む被災者と話していると、「この笑顔を決やさずにすむ、人々の暮らしをサポートすること」ではないかと気づいた。そのためにも、「私たちは応援していますよ！」というメッセージをこの地の人に伝えることが先決だということになり、まず能登の暮らしぶりを、あるいはその背景となる気候、風土、歴史、文化を知って貰おうということから、フォトメッセージ『いとしの能登 よみがえれ！』を発行した。

ところでその沸々と湧き出るエネルギーとはどういうものかを紹介したい。例えば、“ジャパン”と親しまれていて、6000年の歴史を持つ輪島漆器の塗師屋大崎庄右エ門さんは、「先人たちが築いてきた技術、文化を災害に遭ったからといって私たちが途絶えさせてはならないのです。最高の器で、最高のもてなしをすることから築かれてきた能登の食文化を守りたい。」と決意を秘めて静かに語られる。また、能登は信仰心の篤いところでも知られているように、神社・仏閣も多いが、この地震で約600の施設が被害を受けた。その一つ、総持寺通りで全壊になり、再生と書いた賽銭箱と山門だけが残された曹洞宗興禅寺（総持寺祖院末寺）の市堀玉宗住職は、瓦礫の中から自力で這い出



▶足湯風景

し、青空を見上げながら「自分は何のために今日まで生きてきたんだろう」と涙し、やがて再建のために「托鉢は僧侶の本願だ！」と再認識し、能登半島に托鉢の業に行かれた。

先述のフォトメッセージ『いとしの能登 よみがえれ！』でボランティアが集めた“つぶやき”を紹介している。「私はここで死にたいって。ここでは、80 になったばあさんでも楽しみがいっぱいある。一緒にお茶のみする友達も、親戚もいる。お寺参りも楽しいし……、“あんた！お寺参りに行こ！”って友達が誘いにくるねん。」という被災者の生の声を聞くとこの地の暮らしぶりが目に浮かぶ。

こうした能登の人たちの力強さは、この地特有のものかも知れないが、人間には回復力と潜在能力があり、他方、誰にでも災害が降りかかってくる偶有性を考えると、少なくとも私たちは能登の暮らしから学ばなければならないことが多くある。災害後の復興の第一歩で保護の必要な方には適切な支援策を提供し、やがてあらゆる「関係性」により生まれるエンパワメントを引き出しながら、再建の道筋を進んで行かねばならないことは被災者の宿命のようなもので、だからこそ能登から学ぶことの意義は大きいといえる。

では一体何を学ぶのか？ というヒントは、本災害復興制度研究所所長・室崎益輝教授の次の投げかけにある。それは「能登半島地震で、何故一人しか亡くならなかったのだろうか？」との問いかけだ。この問いに対して、先述した『いとしの能登 よみがえれ！』刊行のきっかけになった足湯ボランティアさんが集めてきた生の声“つぶやき”を繰り返し読んでいて、私はあらためて気づいた。例えば次の二つのつぶやきを見て欲しい。

① 村に戻れば畑仕事をして足腰を鍛えるんだけど、避難所は何もすることがない。座っているだけでつまらない。（災害後 5 日目の避難所で、91 才女性）

② 仮設住宅は不便だけど、いろいろとよくして貰っている。近々自宅の離れが住めるようになる。

（災害後 70 日目の仮設住宅で、70 才女性）

このつぶやきから読みとれることは

① 地震に遭うまでは、91 才になっても畑仕事に出るほど足腰が強く、いざというときにも自力で逃げることができたのかも知れない。

② 自宅には離れがある。ということは母屋や納屋、さらに駐車場もあるだろう。能登の住まいの敷地は相当大きいということ。そのうちの取りあえず離れが修理されれば、仮設住宅をでることができるよう、住まいが特徴的なこと。

というわずか 2 件のつぶやきから、災害後の復興において大変重要な対策が見えてくる。前者については、実際にいつも能登に行けばお世話になる方からも聞いた。この方



の家も全壊だったが、グラッときた瞬間夫婦で何も持たずに家を飛び出し、避難所になっている高台の神社に上がったという証言だ。この集落の方は、高齢者も全員その高台に非難したそう。この高台の神社には私も一度上ったが、結構急できついものがあったのに、70 代から 90 代の高齢者でも対応できているということは、やはり普通の鍛え方が違うのだろう。

後者については、この地域は古くから積雪・強風対策に工夫を凝らした大きな住まいを持っている。宝物や季節ごとの生活雑貨などを入れる土蔵などもある。輪島市黒島町は北前船でも有名であり、江戸時代から建つ古民家が今回の地震でも全壊にならずに残っているし、輪島市内の鳳至町の町並みでもおなじように古民家が多い。また、信仰心の篤さを物語る名刹・古刹が多く、その代表的な曹洞宗総持寺祖院も大きなダメージを受けたものの、建物が大きく倒れたというのはいずれにすぎない。

つまりこの地域には、この地域の気候風土に適した材木と日本伝統工法による建築技術が伝わっており、それはさらに歴史を遡ると約 1300 年前からの大陸との交易によるさまざまな文化の継承に起因するところも少なくないだろうと思われる。例えば、700 年代頃に大陸から渡ってきた使節団が数カ月この地域に滞在し、帰国するまでに船の修理もできる大造船所もあったことが遺跡で確認できるのだが、そこには船木部という船大工もいたことや、古くから建立されている神社や寺の建築技術がこの地域に継承されてきたらということはいまは想像がつく。1971 年以降、建築基準法で「建物には粘りが必要」とされていることから考えると、昔ながらの伝統工法による住まいの耐震構造は見逃せないものがあり、今回の能登半島地震でも証明されたようなものである。

この地には「能登はやさしや土までも」という言葉があるが、減災の暮らし方というか、こうした能登の暮らしから学ぶことが、全国共通の日頃の備えとしての知恵につながるのではないと思う。そのためには時間をかけてでも、地震発生時にどのようにして生き延びたか？ という聞き取りが必要ではないだろうか。

# 足湯が拾った“つぶやき”読み解く研究会 実施報告

平田 誠一郎

関西学院大学災害復興制度研究所  
リサーチアシスタント

昨年3月に起きた能登半島地震での被災地で、お年寄りに足湯マッサージをする学生たちの姿が多く見られました。彼らは「中越・KOBЕ足湯隊」と名乗るボランティア集団です。マッサージによって被災者の疲れを癒しつつ、何気ない会話を交わす中で聴こえる「つぶやき」を後で書き留め、被災者支援へのヒントとして役立てています。

災害復興制度研究所では、被災地NGO協働センター、中越・KOBЕ足湯隊と共同主催で、5月31日に「足湯が拾った“つぶやき”読み解く研究会」を関西学院会館にて行いました。この研究会の目的は、足湯隊によって集められた「つぶやき」の意味を探ることです。議論は復興制度のあり方から、調査研究の方法論まで多岐にわたり、あらためて被災者の「生の声」が含む内容の多さ、そしてそれに耳を傾けることの大切さが確認されました。この研究会の様子を以下にお伝えします。

## ◆足湯隊の活躍と「つぶやき」

議論に先立ち、進行役である被災地NGO協働センターの村井雅清代表から、足湯隊のあらましが紹介されました。足湯によるボランティア活動の発端は、1995年の阪神・淡路大震災に遡ります。当時、東洋医学を学んでいた若者を中心に、避難所でのマッサージを行ったことが始まりでした。その後2004年に新潟県中越地震が発生すると、神戸でボランティア活動を行った若者を中心に、長岡技術科学大学、大阪大学、神戸大学、神戸学院大学の学生たちによって「中越・KOBЕ足湯隊」が結成されました。

また「つぶやき」については、討論者のひょうご・まち・くらし研究所事務局長の山口一史氏から、詳しい説明がされました。阪神・淡路大震災の後、ボランティアが仮設住宅などを訪問する中で耳にした、希望や不満を表す言葉の数々を「つぶやき」としてカード化し、およそ千件になるまで集めました。これらは『「仮設」声の写真集』（市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会）という本にまとめられ、その後の政策提言に活かされています。「つぶやき」を集めることと足湯マッサージは、もともと別個に行われていたものでしたが、足湯隊の活動では、両者が一体化して取り組まれています。彼らの能登での活躍は、昨年4月にはテレビ番組でも紹介され、記憶されている方もいらっしゃるでしょう。また村井氏がプロデュースし、今年の4月に出版された写真集『いとしの能登 よみがえれ!』（震災がつなぐ全国ネットワーク）においても、足湯隊の活動が紹介されています。

## ◆能登半島地震からの復興

今回の研究会ではゲストスピーカーを2名お迎えして、話題を提供していただきました。そのうちの一人、石川県輪島市の谷口寛総務部長の報告のテーマは、能登半島地震からの復興状況です。被災地の自治体として災害に直面した経験をもとに、主に復興支援策を中心とした報告がなされました。谷口氏は被災状況について概略を述べた後で、輪島市の復興計画の中でも特色のある「能登ふるさと住まい・まちづくり支援事業」を紹介。これは復興基金事業によるメニューの一つですが、耐震化あるいは景観への配慮、地産材の活用等を伴う住宅の建設・購入・補修に補助を支出するというものです。

また昨年11月に改正施行された被災者生活再建支援法の、遡及適用による影響については、公営住宅への入居希望者が減少し、自力再建が増えたことが報告されました。この他、自宅敷地への公営住宅建設（被災者が自宅敷地を市に無償提供し、そこに建てられた戸建ての公営住宅に入居する。10年後に建物は残存価格、土地は無償で被災者の所有に戻る）について数件の申請があったこと、多くの世帯が自力再建を選択し、被害の大きな4つの地区でも8割が再建に着手し、甚大な被害のあった門前地区総持寺周辺でもすべての世帯の再建に目処が立ったことが報告されました。

そして、今回の能登半島地震からの復興における教訓と課題が提示されました。まず、支援メニューが発災直後に出揃わず、住民による自力再建の決定が遅れたことが教訓の第一に挙げられました。この点については、被災者生活再建支援法の改正で前進がみられましたが、現在県と市で



上乘せ、横出ししている部分に国の支援を求め、支援メニューの定番化をさらに進めることが必要との考えが示されました。また、復興基金の制度については説明を明確に行えるようにすることが提唱されたほか、応急危険度判定や罹災証明について、自治体が事前に体制を整えておくことの重要性が示されました。さらに、現行制度では被災自治体において市町村レベルの財政負担が重くなるという問題が指摘され、この点への対応策の必要性が述べられています。その他にも、建物の耐震化支援の拡大や日常の防災訓練などが課題として挙げられました。

#### ◆「つぶやき」とは何か

もう一人のゲストスピーカーは、中越復興市民会議の鈴木隆太氏です。阪神・淡路大震災をきっかけにボランティア活動を始めた鈴木氏は、海外の計8つの国と地域での活動経験を持ち、現在中越復興市民会議にて、よりそう事業チーフコーディネーターをされています。

鈴木氏の報告では、「つぶやき」について辞書的な意味や老子の言葉による背景から説き起こした上で、新潟県における足湯ボランティアの活動が論じられました。長岡市の浦柄地区では中越地震の直後以来、3年ぶりの足湯を実施し、地区の人々にも大変喜ばれました。その際に聴き取った「つぶやき」を通して、山でもなければ街場でもない、中間的な性格を持つ浦柄地区の暮らしとその課題が描かれています。また出雲崎町では、精神保健福祉士や生活支援相談員、学生ボランティアと中越復興市民会議が共同で、「まめだねの会」というレクリエーションや講話、足湯マッサージを行う会を開催。そこに様々な立場のスタッフが集まることで、「つぶやき」で得た住民の声を具体的に関係者に伝えられた点が報告されました。さらに、新たに足湯ボランティアの活動が始まった栃尾市の栗山沢集落では、お年寄りや若者との交流を深めつつ、畑づくり、料理教室、「土と野菜の勉強会」などを実施しました。そうした中、勉強会に参加しない人の「つぶやき」から、その人の農業へのこだわりが明らかになるなど、鈴木氏が「進めば進むほど見落としていることがあるとわかる」と述べた

ように、「つぶやき」を聴いていくことにはきめ細かな発見が伴うことが指摘されました。

これらの事例を通して「つぶやき」の持つ意味が確認される一方、鈴木氏は数学者岡潔の「スミレの花がキレイかどうかスミレにはあずかり知らぬこと」という言葉を引用し、「つぶやき」を聴く側が、話し手が言葉に託した以上の意味を読み取ってしまう点に注意を促します。人々の言葉はつねに揺れ動く幅があるものであり、発された言葉を問い直しつつ「つぶやき」を聴いていくことが大切だという視点が報告の締めくくりを示されました。

#### ◆「つぶやき」から教えられること

復興支援策と被災者の声という、二側面からのゲストスピーカーによる報告を受け、討論者を交えての議論が行われました。ひょうご・まち・くらし研究所の山口一史事務局長は、足湯隊が阪神・淡路大震災後の仮設住宅でのボランティアと異なる点として、パブリックゾーンで「つぶやき」が聴かれていることの重要性を指摘しました。大阪大学大学院の瀧美公秀准教授は、ボランティアの学生に敬意を表するとともに、「つぶやき」を分析してアドヴォカシー（提言）へつなげるための課題を指摘。誰が「つぶやき」の話者と聴き手であり、誰がその「つぶやき」を編集し、読むのかという点に注意を払う必要性を述べました。

災害復興制度研究所の室崎益輝所長は、「つぶやき」に示された、被災地の声を聴く努力の重要性を強調しました。その上で現行の罹災判定の手続き、メディアによる災害報道に、現場から聴こえてくる声をより多く取り入れることを提唱しました。さらに関西学院大学の宮原浩二郎教授は「つぶやき」の生の声としての貴重さに触れた上で、そこにあたかも読み解くべき正解があるという態度をとらず、学生ボランティアのように、忠実に言葉を拾うことの重要性を述べました。また災害復興制度研究所の山中茂樹教授は、「つぶやき」で聴こえてきた声を整理することによって、研究者や支援者の側にある固定観念が見えてくるとし、従来からの調査方法では捉えられない被災者の現実を知るヒントとなると述べました。

討論者からのコメントも多岐にわたり、会場の聴衆からも意見・質問が出され、活発な議論が交わされました。ここにそのすべてを紹介することはできませんが、コメントを受け鈴木氏は、ボランティアの学生たちも「つぶやき」を拾うことで被災地の人々との一体感を感じていることを強調。村井氏も研究会のまとめを行う中で、若者の姿勢を学ぶことの重要性を述べました。このように「つぶやき」を拾うということは、聴く側の姿勢が常に問われる経験であり、ボランティアだけでなく、研究者や行政を含め、災害復興に携わる人々にとって重要な示唆を持つものであることが、あらためて認識される研究会であったと思われます。

# 観 感 学 楽

かんかんがくがく

被災地を**観**る、  
被災地の痛みを**感**じる、  
そして、  
被災地から**学**ぶ、  
被災地の人たちと**楽**しむ。

## 被災地ネット

阪神・淡路伝え、今なお発信／大牟田智佐子

「ネットワーク1・17」毎週月曜 19:30～20:00  
<http://www.mbs1179.com/117/>

抗震救灾・众志成城

——四川大地震の被災地から／矢守克也

## 阪神・淡路伝え、今なお発信

大牟田智佐子

毎日放送ラジオ局報道部記者  
「ネットワーク1・17」プロデューサー

ラジオの震災番組を10年担当している。「ネットワーク1・17」というこの番組が誕生したのは13年前。あの阪神・淡路大震災がきっかけだった。これだけ続けば長寿番組と呼ばれる。しかしここまでの道は平たんではなかった。

震災直後、人々はラジオに安心を求めた。いつもの時間におなじみのパーソナリティーが出て、リスナーに語りかける。衝撃的な被害情報は必要なかった。むしろ生活を営むため、不安を取り除くための情報や励ましが必要とされた。このニーズに応える形で誕生したのが「ネットワーク1・17」だった。

当初、番組は仮設住宅が解消するまで10年は続ける予定だったという。しかし仮設は5年で解消。「いつまでも震災じゃないだろう」と被災地の外で言われ始め、同時に被災地の中でも「あんな大きな地震はもう来ない」という思い込みが広がりつつあった。南海地震が迫っていると専門家が指摘し始めた時期だ。

そこで番組は「防災」という新たな柱を据えた。南海地震とは何か。津波から逃げるにはどうすればよいのか。現在の地震活動を専門家は どうみているのか。そんな地震と防災にまつわるトピックスを毎週、必ず伝えることにした。ただし学術論文のようにまともに話したのでは、ラジオでは伝わらない。笑いを交え、時には脱線することも必要だ。研究者をゲストに迎える時、私はこう説明した。「1回の番組で1つのことだけ覚えてもらえばいいんです」。

これには理由がある。ラジオを何十分も集中して聴く人は少ない。ほとんどは「ながら聴取」だ。だから難しい話はいくつも盛り込めない。一方で、ラジオは習慣で聴く人が多い。それなら、大切なこ

とは少しずつ繰り返し伝えればよい。リスナーに防災の知識が刷り込まれ、ひいては「防災行動」につながっていくのではないか。そう考えたのだ。意外なことに、地震で肉親を喪った人たちから「大切な話だからこれからも伝えてほしい」という便りが来るようになった。間違っていなかった、と思った。

一方で、この番組は民間放送局にとっては「地味でもうからない番組」だ。スポンサーはなし、内容もくそまじめ。実際これまで何度も番組終了を打診された。それでも続けられたのは、番組が防災まちづくり大賞やギャラクシー賞選奨を受賞し、国内外で相次ぐ自然災害によってその役割が再認識されたからだ。番組の存在意義を、専門家が会社のトップに対して繰り返し指摘してくれたのも強い味方となった。

確かに「地味でもうからない番組」かもしれない。だが、この番組の原点にある阪神・淡路大震災のあの悲劇を繰り返したくない。災害は、人間の記憶から消えた頃にやってくる。そうなる前に、メディアは記憶装置として災害を伝え、防災を呼びかけ続けなくてはならないと思う。その思いだけで今週もスタジオに向かう。

つにして難局を乗り切ろう（大きなことをなそう）」といった意味になると、現地の研究者が教えてくれた。このフレーズに、「がんばろうKOBE」を感じた方も多いのではないだろうか。実際、数多くの「志願者」（ボランティア）が「紅心」（熱い気持ち）をもって、中国全土から被災地に駆けつけている。

こうした巨大な国家的ムーブメントは、たしかに大きな力を発揮している。周知のように、温家宝首相は発災から数時間後に、胡錦濤国家主席も4日後には現地入りして、救援活動の陣頭指揮をとり、その様子は全国に報道された。実際、私たちが出会った被災者の多くが、指導者や志願者への感謝の言葉を口にしていった。「民族・組織・指導者は、中国人の心の回復の三大要素だよ」と語ってくれた現地の研究者もいる。

しかし他方で、こうした動向につきまとう陰の部分に注意を配ることも必要だろう。現地では出会った研究者の一人は、まったく無傷に近い建物、無惨に倒壊した建物が入り交じった「まだら模様」の都江塚市内でのインタビューの後、私たちに、「各階級の自然災害に対する耐性は異なる。貧困層はすべて失う。富裕層は厚く保護されている」との感想を語ってくれた。——言葉の壁もあったと言いつつも——この感覚を、同じインタビューの中から十分くみ取ることができなかった自身の不明を恥じるとともに、現在の日本社会が抱えるものと同じ問題が中国社会にもあることを見逃してはならないと感じる。

文字通り、これからが勝負、である。幸い、現地の方々とのネットワークが立ち上がりつつある。年単位、世代単位の長期的視野をもって、支援活動や調査研究に関わっていきたい。



▲歴史的な建造物の前に広がるテント村  
（都江塚市内で…写真提供：日本災害救援ボランティアネットワーク）

## 抗震救灾・众志成城

——四川大地震の被災地から

矢守克也

京都大学防災研究所准教授

2008年5月25日から29日まで、同月12日に起こった中国・四川大地震の被災地を訪れた。日本災害救援ボランティアネットワーク（渥美公秀理事長）の一員としての訪問であった。今後の支援のための手がかりを得ることや、地元の研究者やボランティアたちとの関係づくりを、主なねらいとした。

題目に掲げた言葉は、大災害に直面した中国社会において国家的なフレーズとなっているもので、町中いたるところで目にする事ができる。4番目の文字「災」は「災」に相当し、5番目の文字「众」は「集」にあたる。前半は「地震に打ち勝とう、被災者を救おう」、後半は「みんなの気持ち（志）を一

# 研究紀要「災害復興研究」第1号、刊行へ

## 論文、実践報告、資料解説など募ります

関西学院大学災害復興制度研究所は今年度末、研究紀要「災害復興研究」を刊行します。第1号は特集と自由論題の二部構成といたします。特集のテーマは「私的法案・制度集」です。復興にかかわる法案・制度案、または現行法の改良について論文を募ります。自由論題は災害にかかわるものなら内容を問いません。希望者は8月末までに論文、実践報告、資料解説などの種別と論題・要約500字程度を添えて研究所あてにメールか文書で申し込んでください。本編の締め切りは11月初めです。投稿規程は次の通り。

### 「関西学院大学災害復興研究」投稿規程

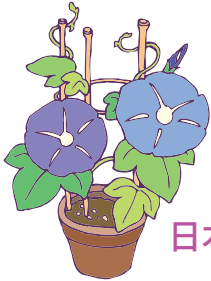
本誌は、被災者支援・復興まちづくり・復興法制度・復興報道など災害復興に関する実証的・理念的研究、評論、実践報告、資料解説、講演記録などを掲載する。

- 投稿論文は、未公刊のものに限る。
- 投稿資格は、原則として本研究所研究員、客員研究員に限る。また、共同論文は、少なくとも執筆者の一人が本研究所研究員か、客員研究員であることが必要である。ただし、特別に執筆依頼する場合はその限りでない。
- 投稿原稿の採否決定、および修正は編集委員会の審査を経て行われる。ただし、編集委員会が認めるものについては、その限りではない。
- 「関西学院大学災害復興研究」に掲載された文章については、関西学院大学災害復興制度研究所がすべて著作権を保有する。
- 投稿原稿の構成は以下の通りとする。
  - 第1ページには、原稿の種別（論文、報告、評論、解説、講演記録など）、和文のタイトル、著者名、所属、連絡先を記す。
  - 第2ページから原稿本文となる。本文冒頭には和文タイトル、著者名、和文要約、キーワードを記す。
  - 論文の場合は、最終ページに英文の論文タイトル、英文のアブストラクト、英文のキーワードを記す。論文以外は不要。
  - 要約は、和文は500字程度、英文のアブストラクトは100～175語、キーワードは3～5語とする。
- 投稿原稿はワープロ打ち・横書きを原則とし、A4用紙で横40字（全角換算）、縦30行とする。原稿量の目安は、次の通りとする。

論文・報告	20,000字～30,000字
解説・評論	5,000字以内
- 投稿原稿は、電子データ（CDもしくはFD）とプリントアウトした副本3部を添付すること。
- 電子データ、副本は採否にかかわらず返却しない。

### 執筆要領

- 文体**  常体（である調）
  - 漢字**  原則として漢字を用いるが、固有名詞、歴史用語又は特殊な用語など、学術書の性格上、常用漢字表にない漢字（表外字）も、適宜許容して用いる。
  - 仮名づかい**  現代仮名づかいによる。
  - 送り仮名**  原則として「送り仮名の付け方（昭和48年内閣告示第2号）」による。
  - 漢字・仮名の用例**  原則として、「公用文における漢字使用等について（昭和56年事務次官等会議申合せ）」による。
  - 数詞**  横書き数字の表記法は半角の算用数字を用いる。特別の場合以外は壱・弐・参・拾・廿・卅などの数字は用いない。  
 西暦年を表示する以外の場合には、3桁ごとに半角の「」をつける。また、小数点を表示するときは、半角の「」を用いる。
    - 分数**  3分の1 30分の1
    - 数の幅の表示**  380-400円 850から920年  
ただし、西暦である期間を表す場合で、間違いの恐れのあるもの以外は下二けたを単位として必要な部分を示す。  
……1920-30年
  - 数量の単位**  次の単位はカタカナか立体的の略字とし、全体を通してどちらかに統一する。
    - カタカナの場合  
5ミリ 10センチ 100メートル（キロ、平方メートル、立方メートル）グラム キログラム ヘクタール パーセント
    - 立体的の略字の場合  
5mm 10cm 100m (km m<sup>2</sup> m<sup>3</sup>) g kg ha % 次の単位は、漢字とする。  
尺 寸 貫 匁 町 反 畝 歩 石 斗 升 合 勺 坪  
ただし、メートル法に換算する場合は、あらかじめ修正してください。
- 符号・記号**
    - 句点の位置・読点**  句点は「。」読点は「、」を使用する。  
 句点「。」の位置が、次の二つとある場合はAに統一する。  
A ……であった（……ともいう）。 ……であった（「××文書」）。  
B ……であった。（……ともいう） ……であった。（「××文書」）
    - 中点「・」の使い方**  名詞の並列の場合に用いる。  
(例) 御三家（尾張家・紀州家・水戸家） 東京・大阪・京都の3都市
    - 圏点**  圏点は横組では中点を使用する。句読点や括弧類などに圏点はつけない。
    - 表・図**  表・図の通し番号は章ごとに通すものとする。  
 表の活字は本文より小さくし、見やすくするためのケイ線を略す。  
 表・図は、本文と同じA4の用紙を用い、1枚の用紙に一つの表、もしくは図を書く。表・図には表1、表2、図1、図2のように通し番号を付け、表題も同じ用紙に明記すること。  
 表・図の挿入箇所は、本文中に3行を用い、以下のように示す。  
……………  
表1を挿入  
……………
    - 出典の表記**  本文中の出典名は、（ ）でくくる。  
 改行で始まる引用文の出典名は、その末行に入れる。
    - 書名等の表示**  書籍名・雑誌名を「 」でくくり、論文名及び文書名などを「 」でくくる（この区別については、原稿に明確に記入してください）。
    - 引用文**
      - 表記**  本文活字と同じ活字にするが、前後1行ずつあけて本文より頭を1字下がりにする。
      - 注記**  引用者の注記であることを示すため [ ] でくくり、読者が判別できるようにする。
      - 省略**  引用文の途中の省略は [ 中略 ] とする。
    - 注**  文末注とする。
    - 見出し**  見出しの階層、表記を全体で統一する。  
見出しの番号は、章単位に通す。  
(例) 見出し はじめに 1〇〇〇 2〇〇〇 3おわりに  
中見出し (1) 〇〇〇 (2) 〇〇〇 (3) 〇〇〇  
小見出し 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇  
(小見出しは、かっこ無しでゴチにする)
    - 参考文献**  文献の表記方法は全体で統一し、章ごとに50音順に並べる。  
(例) 前田章『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房、1971年。  
Northrop Frye, *Anatomie de la critique*, Paris, Gallimard, 1969.



# 事務局だより

## 日本災害復興学会 HP 立ち上げについて

日本災害復興学会のホームページが、今年の4月に立ち上げられました。緑を基調とする目に優しいトップページから、室崎会長のごあいさつ、大会のお知らせ、入会案内など様々なコンテンツにアクセスすることが可能になっています。なかでも特筆すべきは「wiki 復興事典」でしょう。オンライン百科事典のウィキペディア (Wikipedia) をモデルとした、随時更新が可能な事典で、災害復興に関する用語を収録しております。現在のところ各項目の執筆を担当しているのは日本災害復興学会の役員で、6月10日時点で143項目が登録されています。災害復興の研究と実践は、経済、法律、コミュニティ、都市計画、建築、こころ、医療、といった多分野横断的なものであり、見知らぬ用語に出会うことが少なくありません。そうした場合の参照点として、今後も項目数の増加ならびに各項目の内容充実が期待されています。スタートして間もないwiki 復興事典ですが、これまでも事務局の仕事を行う際など、しばしば活用させていただいております。



この他にも、「災害法令リンク集」や今後公開予定の「ブックリスト」など、研究をバックアップするデータベースとしての機能も担っています。ホームページアドレスは <http://www.f-gakkai.net/> です。各種検索サイトにて「日本災害復興学会」と入力して検索することでも表示可能です。

なお、このホームページは日本災害復興学会の広報・デジタル委員会の池田啓一さんを中心とする委員の皆様のご尽力によって作成いただいたものです。学会とともにこのホームページも大きく成長していくことを願ってやまない次第です。まだご覧になっていないという方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度、日本災害復興学会ホームページをご訪問ください。

### 日本災害復興学会 会員募集中!!

日本災害復興学会は、被災した地域や人々の再起を応援する社会システムや制度、まちづくり、さまざまなケアについて関心のある人たちの集まりです。資格、国籍は問いません。これから勉強したいという人も歓迎です。巨大災害が来る前に、みんなでこの国のありようを考えましょう。

#### 《入会方法》

入会申込書に所定の事項をご記入のうえ、下記の学会事務局まで郵送にてお申し込みください。入会申込書は、日本災害復興学会のホームページ (<http://www.f-gakkai.net/>) よりダウンロードしていただくか、下記までご連絡いただき、お取り寄せください。また、後日事務局よりお送りする専用振り込み用紙にて必要金額をご入金ください。

#### (1) 申込書送付先

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
関西学院大学災害復興制度研究所内  
**日本災害復興学会事務局**  
TEL: 0798-54-6996

#### (2) 入会金 3,000円

#### (3) 学会費 (年額)

- |         |        |         |             |
|---------|--------|---------|-------------|
| 1) 正会員  | 7,000円 | 3) 購読会員 | 6,000円      |
| 2) 学生会員 | 3,000円 | 4) 賛助会員 | 一口: 50,000円 |

#### 編集後記

このニュースレターの編集中に「岩手・宮城内陸地震」が発生しました。四川大地震に取って代わり、報道番組はこのニュースでいっぱいになりましたが、それも今は減りつつあります。

世間の記憶 (関心) が薄れていく中で、今回ご寄稿いただいた皆さんのように忘れることなく、見守り続ける方もいます。被災地としてではなく、その土地の文化・歴史を敬愛し、大切にに関わり続ける。今回の被災地でもそんな心のこもった「復興」が進むことを願っています。

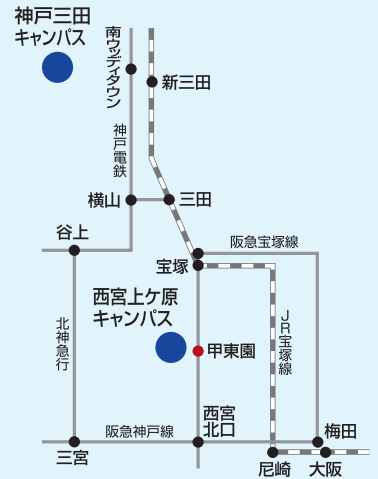
最後に、研究所の夏季開室状況についてお知らせします。ご不便をお掛けしますが、よろしくお願いたします。

#### 夏季開室状況

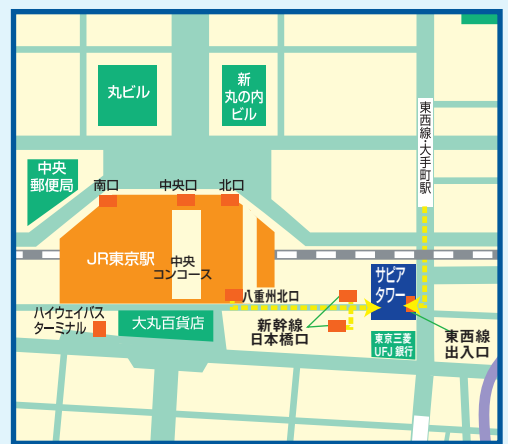
開室期間 8月13日(水)～21日(日)  
開室時間 7月31日(水)～9月24日(水) 9:00～16:00



### 西宮上ヶ原キャンパス案内図



### 関西学院東京丸の内キャンパス案内図



〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12  
サビアタワー 10階  
TEL: 03-5222-5678



**関西学院大学**  
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY  
災害復興制度研究所

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号  
TEL: 0798-54-6996 FAX: 0798-54-6997  
<http://www.kwansei.ac.jp>  
URL: <http://fukkou.net/> E-mail: [kgu\\_fukko2005@fukkou.net](mailto:kgu_fukko2005@fukkou.net)